（僧月性顕彰会会報第一号　中元正男遺稿集より抜粋）

一、月性と月照

柳井市郷談会誌第十三号（平成元年二月）寄稿

まえがき

この文を書いた意味は、海防僧と謳われた妙円寺月性と鹿児島の錦江湾で西郷隆盛と入水して死んだ京都清水寺成就院の月照とは、呼称が同音であるため、今でも混同される場合が多い。呼び名が同じだけでなく混同される理由は、ほかにもいろいろある。月性が月照と同一人物であるかのように扱われることは、月性が国事に尽くした偉大なる功業に対して、まことに遺憾である。このような歯痒いことはない。この文は、世間におけるこうした誤認を解明するため、両師の人物・事蹟を書いて、別人であることを明確にしたのである。

因に両師の交情については、知切光歳氏の著書、長編小説「勤皇僧」（月性と黙霖）の文中に、斎藤拙堂が帰国するに当り、京都の月波楼で催された別宴の席で「月照が月性の傍に来て弟の信海を引きあわせた」とあるほかは文献に月照の名は見当らない。ただ月性の親友である梅田雲浜が月照と交わりがあった関係で、両師はお互いにその存在を認めている程度ではなかったかと思われる。

月性と月照

月性、月照共に僧侶の身で幕末期に梃身国事に尽くしたのであるが、その功績について兎や角論ずるを要しないが、両師の事蹟は可成り異っている。ところで、これから述べんとすることは、月性と月照が世間一般で混同されて、げっしょうといえば月照で混同とはいえ、一方的に月照に同一視されているのである。形容的にいうなら、月性は月照の陰に隠れて見えないのである。それほどに月性は知名度が低く、反対に月照は名高く、その名が一般に浸透しているといえる。

月性の顕彰事業の跡を文献等により辿ってみると、先ず明治二十三年月性の三十三回忌に当り、月性の生前を偲んで友人秋元晩香、門人天地哲雄らが発起して草庵が建てられ、これに旧塾名の「清狂草堂」が付けられた。朝廷より祭祀料（五十円）が下賜されたのもこの時である。同時期、遺物・遺墨の収集に努められた。明治四十年には月性の五十回忌を記念して建碑の議が起り、毛利家をはじめ、吉川、曽根、寺内、楫取、三好、木梨の各高家より相当の建碑費の寄贈を受け、又その他有志の賛成寄附金を得、篆額を毛利元昭、碑文を山県有朋、赤松連城の書で十二月に月性顕彰碑が建立された。法要は除幕式と併せ行われ、尚本山からも特に数十金の建碑費が下賜され、御代香として香川黙識が採訪使として訪れ、島地黙雷も来て焼香、布衍を為し、盛大に修行された。明治四十二年、時の第十六世住職故桂集蔵師が「桂月性略伝」を発行している。この集蔵師は本山の特命で妙円寺住職に任命せられ、同時に請われて桂氏を

相続し、それ以来月性の顕彰には特に力をそそいだ。集蔵師は後に述べる第十八世住職故深井信雄師、第十九世住職故立泉昭雄師らと月性の顕彰に夫々大きな役割を果たされた。大正十二年に月性の映画による顕彰事業が計画実行されたが、これは後で述べることにする。昭和二年には金五百円の予算で資料館の建設が計画されたが、不実行に終わった。昭和四十三年に至り、村長、県議の経歴のある故森本常雄氏が、月性の偉大なる功績を、郷土人としてこのまま放置するに忍びないとの思慮から一念発起され、財団法人僧月性顕彰会を設立し、広く浄財を得て、明治維新百年記念事業として企画した記念館建設等が昭和四十五年漸く完成したのであった。これに伴いテレビ、新聞等により大々的に宣伝周知が計られ、勿論顕彰会自体も、ポスターの頒布、公共機関を通じる等して宣伝にこれ努めたので、月性の名が認識され、大いなる成果を上げ得たことは否めない。而し乍ら、それだけでは充分とは言えず、殊に県外となると今でも月性を話題にすれば「ああ、あの鹿児島で死んだ月照か」と殆どの人が反問する。郷党の一人として、月性を崇敬する者として甚だ遺憾千万、誠に慨歎に堪えない。では月照何故高名なのか確たることは判らないが、思われることは安政の大獄で幕府に追及され、後世英雄となった西郷南州と最後(西郷は運よく助かった)を共にし、その入水を悲劇的、英雄的にみられてか、又活躍が維新策源地の京都にあって舞台が朝廷を中心とした華やかなる役割を称えたものか、何は兎もあれ、今述べた事項を月照没後に於て、この道(学者、歴史家、研究家等)の有力な人達によって維新勤皇史中の花形として取上げられたのが一番大きな要素ではなかったかと思われる。

大正末期に「月照上人」と題する無声映画の巡業班が妙円寺を訪れて、ここの月性と見比べて貰いたいと、本堂で映写されたが、これは全国を巡業したものと思われるので、これ等も月照の宣伝に役立ったのであろう。月性の映画も前に述べたように、予てより月性の顕彰に思いを抱かれていた妙円寺門徒総代(清狂会副会長)である米国帰りの篤志家故高杉房槌氏が巨額の私金を投ぜられ「海防僧月性上人」全八巻その他が日本映画研究所の手で作られ、全国巡業の壮途に就いたが、広島に至り映画解説者(弁士)が不測の事故により死亡したため、雄図空しく挫折したことは痛恨の極みであった。高杉氏の無念は如何ばかりであったか推察するに難くない。而しこの映画を宝の持ち腐れにしておくのは忍びないと、前に述べた住職深井信雄師(清狂会長・雄弁家を以て鳴る人であった)が弁士の代役として周東方面の各地を巡回して、それなりの成果を上げたことが、せめてもの慰めであった。このように先人は月性の顕彰に鋭意努力が払われており、決して拱手傍観されていたのではなかったことがよく判る。

兎に角、今後もこれらの先人が尽くされた跡を継承して、あらゆる方策を以て顕彰に努力することこそ肝要であろう。

次に月性、月照両師の「伝」を簡略に記し、比較対照表を載せ、終りにこの道の諸先生の所見と清狂会月性上人活動写真撮影趣意書も記して筆を置く。

月照の事で序でに述べるなら月照の墓が鹿児島市南林寺町の南洲寺にあるが市内バス観光で、その経路に組み込れていて、車中からガイドしていたのが記憶にある。これも月照の顕彰(宣伝)の一助となっている。

月性上人

周防国、遠崎妙円寺の住職。文化十四年同寺に生まれる。字を知円といい、初め烟溪、後に清狂と号した。天保二年の夏十五歳で九州に遊学して豊前の恒遠醒窓に漢詩を、佐賀の善定寺不及に仏典を学んだ。その後上国して碩儒高僧に接して識見を高め、同七年に広島の坂井虎山に謁して詩を賦す。萩方面に遊び同十四年「男児志を立てて郷関を出づ」の詩を残して大坂に行き、篠崎小竹の門下となり、塾頭となった。嘉永元年、自坊に私塾を開いて、明治維新の大業に有為な人材を養成した。嘉永六年海防を自らの任として諸方の巡講に努め、長藩の国老益田親施・福原越後・浦靱負の各大夫に認められ、采邑を講説せしめた。後に藩の公許となり、防長二州に尊攘の大義を唱え海防の急務を説いて人心の奮起覚醒を促した。これがため世に海防僧とよばれた。安政元年十二月長藩主毛利敬親に建白書を上申し、他藩に率先して討幕の志を起すよう促し、王政復古、国内統一の自説を唱え、先駆者的な役割を為し、明治維新の原動力となった。安政二年十月、本願寺広如法主に招かれて、東山別院に寓し時務策を献上する(これが月性著「仏法護国論」となり、やがて維新に大いなる貢献をした)。更に梁川星巌・梅田雲浜・頼三樹三郎らの志士と交わり、密かに皇室回復の策を計画、ついで翌四年には雲浜の勧めで紀藩(和歌山)に赴き、当路に海防の必要性を力説し、その策を授けて大いに成果を上げた。

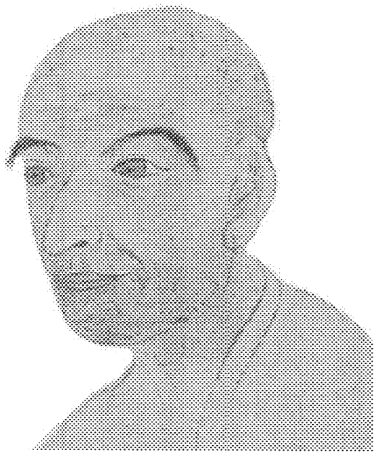
村田清風、吉田松陰・秋良貞温・僧黙霖の諸士と意気投合、憂国の気概を以て交わり、思想的影響を与えた。安政五年春本願寺法主は再び徴したが、にわかに病に罹り、同年五月十日、君国の将来を案じながら辞世の短古一篇を残して寂す。年四十二。

月性は、豪放不羈、平素辺幅を飾らず、破衲を意とせず、頭髪栗茨のようで巡歴の際など、よく旅宿の主人脱獄人と誤り容易に宿泊を許さず、これがため知人が仲に入りて漸く宿泊を得たという。又月性開蕩の性で頗る酒を嗜み数百金を散じて意に介しなかった。

会飲の席で酔えば時世を悲憤慷慨し、傍客の剣を取り剛吟掀舞するを常とした。誠に傍若無人の観があり、僧とはいえども実に古武士に匹敵するものがあった。

月照上人

文政十年十五歳にして幼名宗久として京都清水寺成就院に入室、叔父蔵海の弟子となり、天保六年二十三歳で師に代わって住職となった。安政元年二月寺務を弟信海に譲り、以後京都にあって尊攘運動に身を投じた。すなわち、水戸藩の京都手入れには鶏飼吉左衛門・梅田雲浜らの志士と結んで、密勅降下の画策に最も努めた。これがために、安政の大獄には幕府の追及をきびしく受けた。同五年九月近衛忠熙の勧説に従い、薩摩



藩の西郷吉兵衛(隆盛)・有村俊斎(ありむらしゅんさい)らに護られて難を大坂に避け、ついで海路九州に逃れ、十一月平野国臣(ひらのくにおみ)と共に辛じて鹿児島城下に入った。しかし薩摩藩は難の及ぶを恐れ、その滞留を許さず、日向に移そうとするに至った。かくして同月十六日、西郷隆盛と相抱きて錦江湾に入水自殺をとげた。年四十六。なお西郷はその時辛くも助けられて一命をとりとめた。

月照の人物については、彼の西海逃避行に西郷と共に護衛の役をつとめた当時の有村俊斎(後の海江田信義(かえだのぶよし)子爵)がその「回顧談」に、「其(そ)の人と為(な)りや、慈悲(じひ)あり、智慧(ちえ)あり、眉目清秀(じもくせいしゅう)威容端厳(いようたんげん)にして、風采(ふうさい)自ら人の敬信を惹(ひ)くものあり」といっているがこの短い言葉の中に月照の全貌をつくしているというべきであろう。

○『勤王僧月性伝』昭和十七年六月一日発行の山田忍三氏の序文の中に、

「殊(こと)に『月性上人』の事蹟が西郷南洲と併せ有名なる『月照上人』の事蹟と混同されて、世に伝わるのは、予の最も遺憾不快とする所である。されば、ここに勤王僧月性上人の正伝を梓行し遍(あまね)く、大方とその偉業を讃仰すると共に、謹んで亡父芝友房仏子真成師位の霊前に捧げ、子として父恩に報ずるの一端としたい。」とある。

山田氏は県下の成功者で父は光市錦町共栄寺の住職浪山真成師で月性の門下生であった。

○同発行本の著者吉富治一氏の跋文の中に、

「幕末内憂外患交々至り天下騒然鼎沸の際、僧侶にして勤王憂国の念を懐き挺身国事に奔走し、餘烈施いて明治維新回天の偉業を賛したる者

	月性	月照
時代	文化十四年(一八一七)～安政五年(一八五八)五月十日	文化十年(一八一三)～安政五年(一八五八)十一月十六日
身分	僧侶(詩人)	僧侶(歌人)
生地	大畠町遠崎	大阪市平野町心斎橋西
宗旨	浄土真宗本願寺派	北法相宗
寺院	照光山妙円寺	清水寺成就院
所在地	生地に同じ	京都市東山区清水一丁目
俗姓		玉井
字名	知円	中将房
通称	妙円寺月性	成就院忍向
雅号	清狂	月照
死様	毒殺・病死の二説	入水自殺
死没齢	四十二	四十六
贈位	正四位	正四位
著書	清狂吟稿・仏法護国論・南紀行日記・東北遊日記・今世名家文鈔・内海杞憂・封事草稿	詠草・落葉塵芬集

が甚だ多い。我が月性師の如きは其の最も顕著なる者である。師は奇僧であり、豪僧であり勤王僧であり海防僧であり、且つ又詩僧でもある。其の多彩多角の性格と其の曲折波瀾に富める生涯と其の精妙なる詩賦とは之を研究する者をして興味津々たるを覚えしめる。然るに世人必ずしも其の事蹟を詳にせず、甚しきは往々にして月性、月照音同じく、略々時代を同じく且つ共に勤王僧たるより、二者を混同する者あるに至っては月性の為に悲しむべく月照の為にも悲しまねばならぬ。これに於いて月性伝の必要を感ずる。」とある。

○『燃ゆる闘魂』昭和十八年三月二十五日発行の著者松村白南氏の「序に代えて」の文中に、

「月性は維新回天に首功を樹てた長防を中心として、詩人として、宗教家として法を武器として王事に戦った思想戦士であるが、彼の名は未だ人々に膾炙されず、往々にして月照と同一人物であるかの如く扱はれることは、彼の偉大なる精神的貢献に対して寔に遺憾に堪へず、敢て本書に於て月照と共に名を列ねて顕彰せんと試みた所以である。」とある。

又同書「勤王僧月照」の項目の冒頭の「維新と月照の役割」の中に、

「維新の勤王僧に妙円寺月性といふ人がある。周防国遠崎妙円寺の住職で、一名海防僧の異名をとった。これも沙門出身の傑僧であったが、時代が月照と殆ど相同じく、しかも名が同音である処から、往々にして月性は月照の事であるかの如く思はれてゐることは、月性にとっては甚だ気の毒であるが、それほど月照の名が一般に高いことを物語るものといへよう。」とある。

○『勤王僧』昭和十八年七年三十日発行の著者知切光蔵氏の「まえがき」の文中に、

「なるほど月照は幕末勤皇史中の花形ではあるが、その點でもまた、月性必ずしも月照に遜るものではない。その精神に於て、その論に於て、その識に於て、――そしてその天衣無縫な勤皇行状にいたっては、月照よりももっと多彩な途を歩んでゐる。」とある。

○『京大教養部報』昭和五十六年一月二十日発行の中に筆者海原徹氏の「僧月性とその門下」の文中に、

「僧月性といっても、ごく一握りの研究者以外には殆ど知られていない人物かもしれない。流謫の逆境をはかなんで薩摩沖で西郷隆盛と入水死した清水寺の月照と混同されるような状況は今もある。もっとも月性の方は同じ過激派でも抱き合い心中するような柔弱な徒ではない、自ら清狂と号し、一切の常識をすて、非常むしろ狂たることによって革命的状況を造りだそうとした、その人となりは豪放不羈数々のエピソードに満ちている。」とある。